

社長の本棚

昨年から中村天風にドハマリ。私の背骨になる本です



Resorz社長
児嶋裕貴さん
37歳

海外進出を狙う日系企業に対し、各国の企業（コンサル・税理士・物流・人材など）の仲介や情報提供を行う海外進出支援プラットフォームDigi-ma（出島）を展開。創業は児嶋さんが28歳の時だ。学生時代の世界放浪から現在に至るまで、50カ国以上を巡ってきたという。

「卒業したら就職、大それた自分たちの優位性に入社したら安心な性」に気がついていませど、いわゆるレールに。日本を元気にする乗れば本当に幸せになるには、海外と日本の両者の懸念や苦手意識から、18歳の頃から人を増やすことが鍵。海外に飛び出したんで、そこでまず、日本企業ですが、世界を知るほどの海外展開支援事業をに逆日本にの良さに感じよと起業したんで付いたんですよ。こすよー

でないのと同じ。本から情報を得て、そして行動することで知識は生かされる。昨年、イスラエルに行ったんですが、行く前に歴史、宗教の本を熟読。ユダヤ人の思想やユロ同論を知っていたことで、現地の人との会話や理解度は全然違いました。最近で著『異文化理解力』がヒットでしたね。児嶋さんはResorz社ほかに英会話学校も経営しており、講師の出身国は40カ国と幅広く、文化の違いに苦労することが多かったという。

楽しむ読書から人の役に立つための読書へ

社員全員で「400タイトル以上」読破



「人種も文化も違う国を訪れる中で、本質を抱いていましたか」とは何かとずと考えていたんです。古今東西に共通し、普遍的なもの、自分の軸にした。メンツに苦労していた社員には「最高のリーダー、マネジャーがいつも考えているたったひとつのこと」を選んだ。また、毎月1度みんなで同じ本を読み、考えや知識を共有している。社員全員で400タイトル以上を読破した計算になる。「アドバイスするのは簡単ですけど、人って自分で気付いたほうが腑に落ちると思うから」と笑う。

社内では、「読書のすゝめ」という本の購入と書評を1分間のピッチで紹介し合うユニークな制度を3年前から実施している。毎月2冊購入可で、そのうち1冊は児嶋さんが、今その人につけてほしい知識や能力をもとに本を選定する。マネジ

